

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

設立記念国際シンポジウム

—中国西南地域の鉄から古代東アジアの歴史を探る—



2007年10月27日

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター設立記念国際シンポジウム

—中国西南地域の鉄から古代東アジアの歴史を探る—

主催：愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 共催：愛媛大学国際交流センター

日時：2007年10月27日 10：00～16：30

会場：愛媛大学メディアホール

《プログラム》

1. 学長挨拶 小松 正幸 愛媛大学学長

2. 講演① (10：10～11：00)「中国における鉄の起源と波及」
東アジア古代鉄文化研究センター センター長 村上 恭通

3. 講演② (11：00～12：00)「中国西南地域・成都平原における鉄器文化前史」
成都市文物考古研究所 所長 王 毅

◎お昼休み (12：00～13：00)

4. 講演③ (13：00～14：00)「成都平原における製鉄遺跡の調査成果とその意義」
四川大学歴史文化学院考古学系 副教授 李 映福

5. 講演④ (14：00～15：00)「長江三峡地区出土の初期鉄器と研究成果」
重慶市文物考古所 所長 雛 后曦

◎休憩 (15：00～15：10)

《シンポジウム》「中国西南地域の古代社会と鉄」(15：10～16：30)

村上恭通・王毅・李映福・周志清 (成都市文物考古研究所)

司会進行：村上恭通 (センター長)

東アジア古代鉄文化研究センター 設立記念シンポジウム開催に当たって

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

センター長 村上 恭通

昨今、鉄の歴史に対する関心はますます高くなりつつあります。それは日本だけでなく、アジア各地においても同様です。

アジアの歴史や地域社会の発展に、鉄がどのようなインパクトを与えたのか、それを多角的な視野から追究したい……。そういう希望に応えるべく、2007年7月2日、愛媛大学に東アジア古代鉄器文化研究センターが開設されました。

目下、本センターが重点的に取り組んでいるのが中国四川省における発掘調査です。四川省というと、『三国志』で有名な「蜀」の地域です。2006年度、四川省の成都市文物考古研究所（王 毅所長）と正式に共同調査の協定書を取り交わし、中国国家文物局の許可を得て、現在、本格的な製鉄遺跡の調査が進行中です。

私たちが重点的に調査を進めていく四川省、そして今後の調査予定になっている重慶市・雲南省・貴州省では、古代において特異な鉄器文化が生まれました。独自の鉄器文化と中原地域由来の鉄器文化が混在し、そこに複雑な民族社会のあり方が見て取れます。例えば地域独自の鉄器として青銅の柄をもった鉄剣（銅柄鉄剣）に代表される銅鉄複合製品が数多く見られます。それは中国西北地域・長城地帯でもよく見られる古い銅・鉄器文化と源を同じくするものです。そして西南地域に伝来した後は、非常に特異な銅鉄併用の文化として発展し、かつ中原民族の勢力の拡大に伴って普及した中原式の鉄器と混在し、独特の金属器文化を生み出しました。このような周辺地域の世界における鉄文化のあり方は、日本の、すなわち「倭人」の鉄文化を考えるうえでも大いに参考になります。

本格的な調査に着手してあまり時間はたっていません。しかし、本センターを開設した記念であると同時に、その成果を少しでも早く多くの方々に知っていただきたく、今回のシンポジウムを準備いたしました。シンポジウムでは調査の成果だけでなく、中国西南地域から中国の鉄の起源を読む観点や鉄器出現以前の成都平原の社会の様相、そしてたいへん著名な重慶三峡地区における初期鉄器といったテーマを議論したいと考えています。

今回のシンポジウムが、中国西南地域の鉄器文化、そして東アジアの鉄器文化を新たな視点で捉えるための第一歩となれば幸いです。

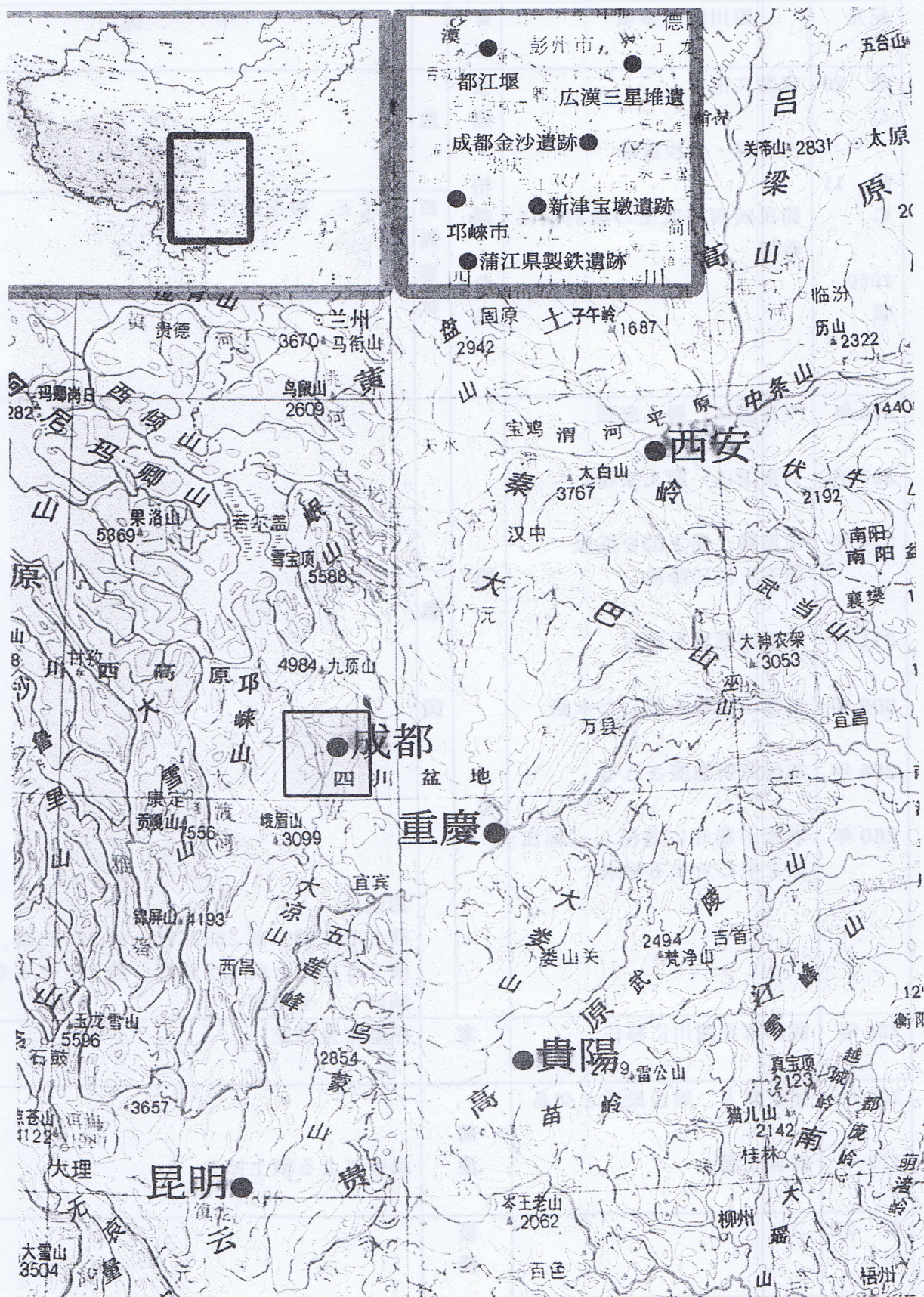
2007年10月27日

目次

中国西南地域関連地図	・・・・・・ 1
古代四川関連年表	・・・・・・ 2
講演① 「中国における鉄の起源と波及」 村上 恭通	・・・・・・ 3
講演① 論中国的鉄器起源波及問題	・・・・・・ 7
講演② 「中国西南地域・成都平原における鉄器文化前史」 王 毅	・・・・・・ 9
講演② 中国西南地域、成都平原の鉄器文化前史	・・・・・・ 12
講演③ 「成都平原における製鉄遺跡の調査成果とその意義」 李 映福	・・・・・・ 14
講演③ 成都平原中日合作早期冶鉄考古的发现及意义	・・・・・・ 18
講演④ 「長江三峡地区出土の初期鉄器と研究成果」 雛 后曦	・・・・・・ 21
講演④ 長江三峡地区出土の早期鉄器与其研究成果	・・・・・・ 27
コラム 「四川の自然地理と鉄器の伝播」 佐々木 正治	・・・・・・ 30

例言

1. 本資料集は、シンポジウム各講演の理解のため、また四川省の地理・歴史の理解に役立つことを目的として作成しました。
2. 本書ならびに講演発表には未発表資料が含まれています。その引用に当たっては、各講演者に照会してください。
3. 講演①の中文訳・および講演②～④の日文訳、地図及び年表の作成、全体の編集は、佐々木正治が担当しました。



紀元	四川関連事項	蜀王		中 国
前 20 C	宝墩文化	蚕 叢 ・ 柏 灌 ・ 魚 鳧	殷	
前 11 C	三星堆・金沙遺跡		西 周 春 秋	周武王、殷を滅ぼす
1050 頃	蜀民族西周武王の殷討伐に参加			
475 年	(秦国に) 蜀人来朝	開 明	戦 国	秦国は 前 230 に韓、前 228 に趙、前 225 に魏、 前 223 に楚、前 222 に燕、前 221 に斉を 滅ぼし、全国統一
337 年	(秦国に) 蜀人来朝			
316 年	司馬錯、蜀王国を征服 蜀王を侯に降格			
311 年	成都に都城を建設			
309 年	田律・歳時を記した木簡			
285 年	蜀侯開明氏廃される			
250 年	李冰が蜀守に着任し、都江 堰を中心とする治水			
221 年	製鉄家を四川に移住	秦		始皇帝全国統一
202 年	製鉄商人、周辺民族と交易	前 漢		武帝による領土拡大
119 年	鉄官設置			
後 25 年		後 漢		
220 年	張巍 周辺民族を攻める	三 国		

古代四川関連年表

講演① 中国における鉄の起源の波及

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 村上恭通

鐵、黒金なり、…… 鍔、古文の鐵、夷に従う。（『説文解字』第十四篇上）

一. 東アジアの鉄の黎明－隕石の使用から－

黄河文明、すなわち殷（商）代の黄河中流域では著しく青銅器の鑄造技術が発展した。その中期から続く西周代前半期にかけて（今から 3400 年前～2900 年前）、刃の部分にのみ鉄をはめ込んだ青銅武器が黄河下流域に登場した〔佐々木 2000〕。その武器とは中国独自の武器で長い木柄をつけた鉞（まさかり）や戈（か）である。ただし、その鉄は隕石（隕鉄）であった。このような金属製品を銅鉄複合器などと呼ぶが、ユーラシア大陸における最古の鉄はこのように隕鉄の加工品として登場する。世界最古の鉄を産したとされるヒッタイトがあったアナトリア高原（現在のトルコ共和国）では金の柄をもった鉄剣（金柄鉄剣）が有名である。これは中国よりもはるかに古い年代をもつ。

二. 中国における鉄剣の登場

人工鉄で作られた中国最古の鉄器は西周後期（今から約 2800 年前）に登場した。黄河中流域にあたる河南省三門峡市上村嶺虢国墓地の 2001 号墓（虢季墓）より出土した〔河南省文物考古研究所ほか 1999〕。その鉄は玉の柄に、銅芯を介して結合した剣身に鍛えられていた。つまり玉柄（銅芯）鉄剣と呼ばれている。この鉄剣で注目しておく点は二つある。

一つは剣身の中軸に脊（むね）が走っている点。

二つ目はこの鉄が塊錬鉄と呼ばれる炭素分がきわめて低いものであり、のちに炭素が表面から加えられているという点（滲炭法）。戦国時代以降は炭素分が高く、液体化した鉄、すなわち銑鉄生産が中心となるが、最初期は塊錬鉄として登場している点は重要である。

この西周後期から春秋時代にかけて、しばらくは鉄は剣に採用されることが多い。しかも金柄や青銅柄に装着されている。その出土地は甘肅省、陝西省など中国でも西に偏る。このことは先述したヒッタイトの金柄鉄剣、そしてやや時期は下るもののコーカサス地方の銅柄鉄剣〔村上 1987〕などと無縁とは考えられない。鉄は中国の西あるいは西北から伝わった可能性を示唆する。

三. 中国における金属器使用開始

殷代は鑄造された青銅容器が著名である。しかし青銅器そのものの使用は近年の研究からやはり中国西北方から伝わった可能性が高い〔梅・高浜 2003、リンドフ 2004〕。すなわち中央アジア、そしてさらに西方の世界を想定する必要が出てきた。また金属技術が馬を生産し、使用する習慣とともに伝わってきたことについても、議論が盛んに行われている〔リンドフ 2003〕。

四. 中国西南地域から中国の鉄の起源を考える

西北地方から導入された中国の鉄器文化をなぜ西南地域において考え得るのか？

それは西北地方と西南地方とが、密接な南北関係をもっていたからにほかならない。西南地域と北方とを具体的に関連づける視点は童恩正先生の研究にすでに現れ

ていた〔童 1987〕。今や、次のようないくつかの事象によってより直接的に西北地方と対照しうる。

①四川省西部や雲南省で顕著な三叉格（格＝鏑）を有する青銅短剣の祖型が新疆ウイグル自治区哈密（ハミ）天山北路墓地で発見されていること。青銅ナイフ（刀子）なども類似性が高い。すでに鉄の出現以前に中国西北地域とつながるルートが形成されていた。

②同地域では戦国時代から漢代にかけて三叉格銅柄鉄剣が卓越する。鉄を剣身のみ採用するという古来の手法が西北地方からの鉄の導入時に直接南下した可能性が考えられる。また最古級の西北地域の複合鉄剣同様、剣身に脊（むね）をもつものが多い。

③雲南省の銅鉄複合器のなかにはやはり刃部のみに鉄を採用した武器や工具が多い。中国西南地域、とりわけ雲南省や貴州省では、鉄器が普及した漢代以降もあえて利器は青銅器が主流であり、鉄は刃部のみに採用するというように稀少価値的なありようを呈する。これそのものが鉄を稀少価値と見なした鉄導入期の中国のあり方に通ずる。

五．成都平原の鉄生産

中国西南地域で戦国時代後期以降流通した鉄は四川省成都平原、とりわけかつて臨邛（りんきょう）と呼ばれた地域が担った。現在で言うところの邛崃（きょうらい）市と蒲江（ほこう）県である。銅柄鉄剣に採用された鉄の歴史はさらに遡ると推測されるが、その生産遺跡をこの地域で解明することができよう。

またこの地は秦の始皇帝が鉄生産の役所（鉄官）を設置した場所として知られる。また前漢代の大富豪、卓氏や程氏が製鉄業を営んだ地域でもある。前漢武帝も鉄を国の専売制とすべくここに鉄官を設置した。

そして私たちは現在、この蒲江県で製鉄遺跡を発掘している。
中国における国家形成と鉄生産との関係に、今メスを入れようとしている。

【文 献】

童恩正 1977「我国西南地区青銅劍的研究」『考古学報』1977-2

童恩正 1987「試論我国從東北至西南的辺地半月形伝播帯」『文物与考古論集』文物出版社

村上恭通 1987「ウクライナ地方における製鉄の歴史」『たたら研究』28 たたら研究

宋治民 1997「三叉格銅柄鉄剣及相關問題探討」『考古』1997-12

河南省文物考古研究所・三門峡市文物工作隊 1999『三門峡虢国墓』文物出版社

佐々木正治 2000「殷周鉄刃利器の再検討」『製鉄史論文集』たたら研究会

梅建軍・高浜秀 2003「塞伊瑪-図比諾現象和中国西北地区早期青銅文化」『新疆文物』2003-1

Linduff, K.M., 2003. A Walk on the Wild Side: Late Shang Appropriation of Horse in China. *Prehistoric Steppe Adaptation and the Horse*. McDonald Institute for Archaeological Research.

Linduff, K.M., 2004. How Far does the Eurasian Metallurgical Tradition Extend ?. *Metallurgy in Ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow River*. The Edwin Mellen Press

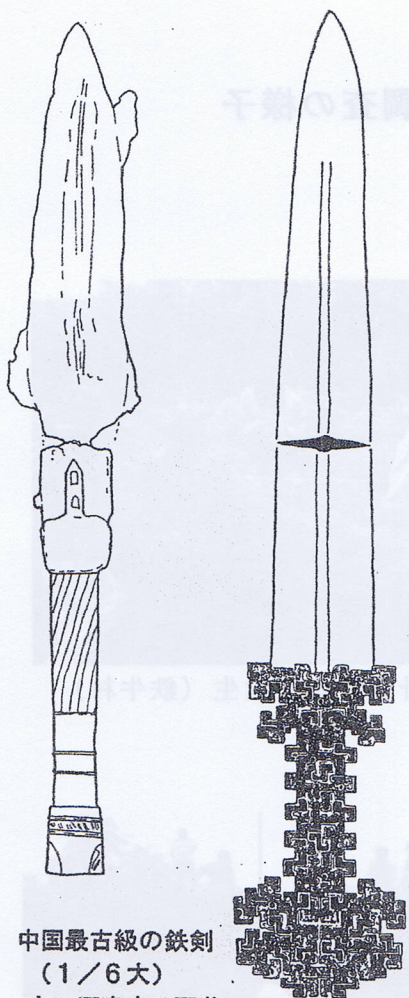


図1 中国最古級の鉄剣
(1/6大)

左：河南省虢国墓
(玉柄鉄剣・西周末期)
右：陝西省益門村
(金柄鉄剣・春秋末期)

図2 中国最古級の青銅短剣
(1/6大)
新疆ウイグル自治区天山北路墓地

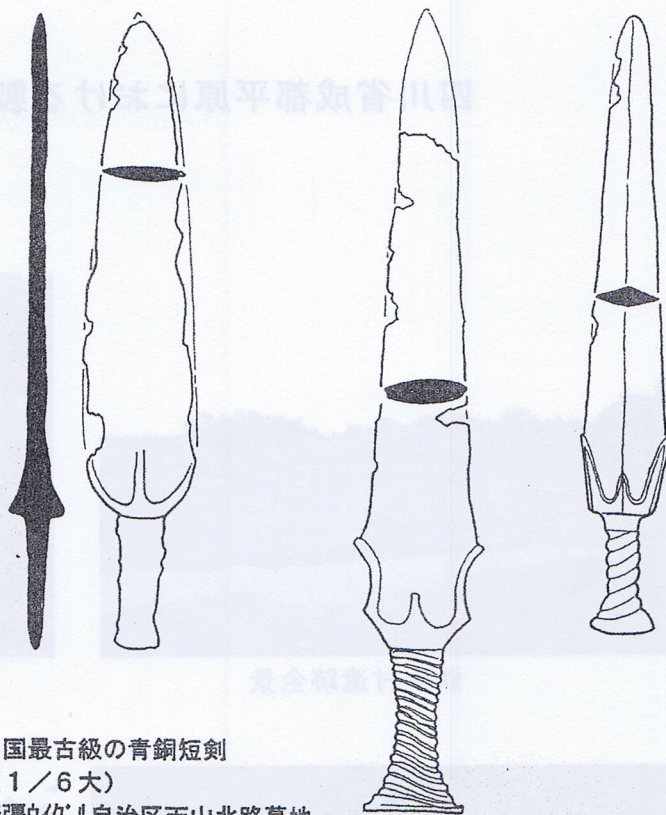


図3 中国西南地方の三叉格銅柄鉄剣
(1/6大)

左：雲南省李家山遺跡
右：四川省牟托遺跡

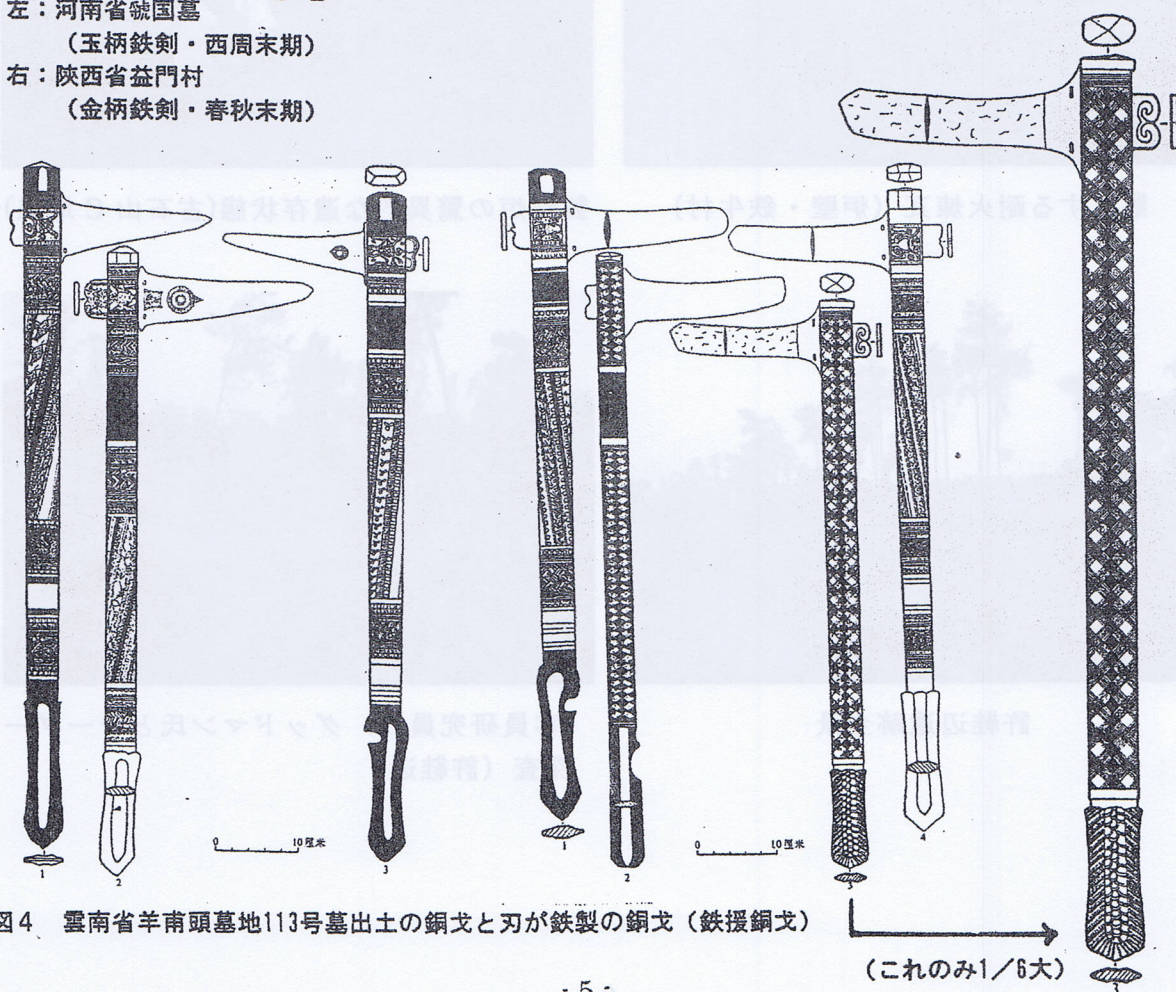


図4 雲南省羊南頭墓地113号墓出土の銅戈と刃が鉄製の銅戈(鉄援銅戈)

(これのみ1/6大)

四川省成都平原における製鉄遺跡調査の様子



鉄牛村遺跡全景



大鉄塊を計測する愛大生（鉄牛村）



散乱する耐火煉瓦（炉壁・鉄牛村）



製鉄炉の驚異的な遺存状態(古石山 C 地点)



許鞋辺遺跡全景



客員研究員D. グッドマン氏とレーダー
探査（許鞋辺）

讲演① 论中国的铁器起源波及问题

爱媛大学东亚古代铁文化研究中心 所长 村上恭通

鐵，黑金，…… 鍊，古文鐵，從夷。（『說文解字』第十四篇上）

一．东亚铁的黎明——以陨石的应用为开启——

在黄河文明，即商代的黄河中游上显著发展青铜器铸造工艺。从商代中期延续下来到西周前半期（距今 3400 年前～2900 年前），只在刃口部分嵌装铁的青铜兵器登场于黄河下流域（佐々木 2000）。其兵器是中国独特的兵器，就是安装于长木柄的钺和戈等，但是其刃部的铁就为陨石（陨铁）。一般将这种金属器物称为铜铁复合器，从欧亚大陆的情况来说，最早出现的铁是作为陨铁加工品而登场。在被认为世界上最早产生铁的赫梯在于的安纳托利亚高原（现土耳其共和国），装金柄的铁剑（金柄铁剑）是著名的，而属于比中国最早铁器更早的年代。

二．在中国的铁剑出现

铁制作的中国的铁器是在西周晚期出现（距今 2800 年前左右）。这是相当于黄河中游的河南省三门峡市上村岭虢国墓地 2001 号墓（虢季墓）发现的（河南省文物考古研究所等 1999）。其铁部锻造成为以铜芯为接合部件而安装于玉柄的剑身，即是称之为玉柄（铜芯）铁剑。关于这一铁剑，值得注意两个特征。

一是剑身中央具有脊这一点。第二是这种铁是含碳量很低的“块炼铁”而制成后从表面再加上碳这一点（渗碳法）。战国时代以后，主要生产以含碳量高、液体化的生铁，与其比较起来，最早作为块炼铁而出现是充分值得注意。

在西周晚期至春秋时代，较多采用铁制作为剑，并装于金柄、铜柄等。其出土地偏集于甘肃省、陕西省等中国西部。关于这种分布情况，不能离开与上述的赫梯的金柄铁剑以及高加索地区的铜柄铁剑（时代较下降）（村上 1987）等的关系。这一点暗示铁是从中国以西或西北传来的可能性。

三．在中国的金属器使用开端

在商代，采用铸造技术的青铜容器造是很著名。但是，根据近年的研究来看，青铜器本身的使用也可能从中国以西北地方传过来（梅·高浜 2003、Linduff,2004）。我们应该考虑中国金属器的使用与中央亚洲以及更西边世界的关系，实际上有些学者较热烈地讨论金属技术伴随着生产和使用马的俗习一起传播的可能性（Linduff,2003）。

四．从中国西南地区探讨中国铁的起源

我们为什么得以从西南地区的铁器来探讨从西北地区传来的中国铁器文化呢？

这因为西北地区和西南地区之间存在着充分密接的南北关系。将西南地区与北方连接的观点已经能在童恩正先生的研究上所见（童 1987）。现在，我们根据如下几种现象来得到更直接地与西北地区对照。

1. 四川省西部、云南省等地常见带三叉格的青铜短剑，其祖形在新疆维吾尔自治区哈密天山北路墓地有出土。青铜刀子等也有较高的类似性。看来，铁器出现之前，已经形成了西南地区与西北地区沟通的路线。

2. 同地区从战国时代至汉代明显增加三叉格铜柄铁剑。因此，我们也可以推测只在剑身部采用铁的古老的工艺技术伴随着西南地区从西北地区获得铁而直接向南传播。与西北地区的最早铜铁复合剑同样，西南地区的剑在其剑身上具有脊这件现象也是一种

佐证。

3. 在云南省发现的铜铁复合之中可见不少只在刃部采用铁的兵器和工具。中国西南地区，尤其是云南、贵州等地，在铁器已经充分普及的汉代以后，主要使用的利器还是青铜的，并且铁只采用于刃部是呈现稀少而产生的价值。这种现象本身与铁刚传到中国之际的情况相似。

五、成都平原的铁生产

战国晚期以后在中国西南地区流通的铁属于四川省成都平原所生产、尤其是临邛是主要生产基地。临邛相当于现在的邛崃市和蒲江县。采用于铜柄铁剑的铁的历史应该可以溯上到更早时期，其生产遗址也可以在该地区寻找。

临邛也作为秦始皇在其设置铁官的地点而出名，并且是西汉时代的富商大贾（即卓氏、程氏等）从事冶铁的地点。西汉武帝也为了将铁的生产成为官营而在临邛设置铁官。

我们研究中心就现在在这一蒲江县进行冶铁遗址的发掘调查、已经入手了彻底查清中国的国家形成与铁生产之间的关系。

講演② 中国西南地域・成都平原における鉄器文化前史

成都文物考古研究所 王 毅

一. 前言

貴校愛媛大学と中国側成都文物考古研究所および四川大学などの機関は、2006 年度から中国西南地区初期鉄器の研究と保存というプロジェクトの実施を開始し、すでに一年以上が経過した。この一年の期間に、日中双方により館蔵鉄器の研究、製鉄遺跡の調査・試掘、出土鉄器の技術保存実験など、一連の実質的な共同研究活動が進められ、重要な学術成果を得ている。

成都平原の初期鉄器の研究と西南地域古代文明の間には密接な繋がりがあり、鉄器の発明は画期的な変革の代表的な技術として、人類発展過程に深く影響した。鉄器の出現は、西南夷（少数民族）地域の古代族群の本来の生態発展方式に強烈に影響をもたらした。西南地域古代文化の研究は成都平原初期鉄器と切っても切れないのであり、逆に成都平原初期鉄器の研究もまた、中国西南古代文化発展過程の研究において重要な組成部分となっているのである。

愛媛大学の村上教授をはじめとする研究者の方々は、長期にわたり東アジア鉄器の考古学研究に力を尽くし、人々に注目される成果を収めてきた。彼らの研究領域は、東アジア各国の古代製鉄遺跡の調査・発掘・研究だけでなく、さらには鉄製遺物の保存処理・古代工芸技術の復元と有効再利用といった領域に及び、こういった研究は東アジア各国の製鉄考古学研究と出土鉄器の保存処理技術の水準向上を、最大限に推し進めることとなった。それゆえ、我々中国側が愛媛大学と共同研究を進める際には、製鉄遺跡の考古調査・発掘を基礎とし、また鉄器の研究・分析・保存処理を手段として、地域的な体系的調査と総合研究を進める必要を強く感じたのである。今後共同研究が深まることにより、中国西南地域の鉄器の起源・発展・製作技術・技術伝統・製錬規模・分布範囲・交易形態などなど、多くの重要な意義をもつ学術問題がさらに明らかになっていくことは間違いない。

二. 成都平原鉄器出現以前の考古学文化体系

成都平原は長江上流域の古代文明の中心として、今から五千年前より、宝墩文化・三星堆文化・十二橋（金沙）文化から戦国時代の青銅文化に至るまでの、連綿と発展した古蜀文化編年体系を形成した。これは成都平原の悠久の歴史と独特の古蜀文明体系を反映している。

今から 4700～3700 年前の宝墩文化は、成都平原において目下のところ遡り得る最も早い考古学文化であり、その主要な分布は成都平原の西部ないし西南部である。1996 年～2001 年には、新津宝墩・郫县古城・崇州双河・紫竹古城・温江魚鳧城・都江堰芒城・大邑塩店・高山古城など 8 座の城址が発見されており、成都平原新石器時代の歴史文化の様相に対して初歩的な認識を得ることができた。これらの古城の面積は 60 万平方米～10 万平方米の間で、巨大な夯土城墙と大型建築群および儀礼性の建築が出現しており、この時期の居住者の社会組織構造と階層分化が既に複雑な段階に進み、文明の要素がすでに育まれていたことを説明する。宝墩文化の発見と研究は、成都平原新石器時代の居住者の歴史文化の様相と内容を深く認識するのに重要であり、また三星堆文明形成の条件と基盤を究明するのに重要な手がかりを提供してくれる。

3700 年前ごろに、成都平原は青銅時代に入る。成都北部の広漢市内の三星堆遺跡

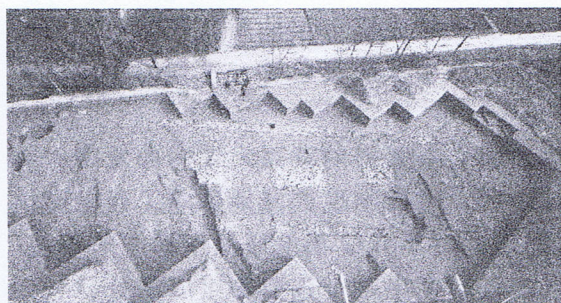
がこの時期の傑出した代表で、その分布面積は3平方kmに達し、主な文化盛行の時期はおおよそ3700前から3150年前の間（中原地区の夏商時期に相当）で、三星堆遺跡は周囲を重厚で高大な夯土城墙に取り囲まれた巨大な規模の中心都邑である。その聚落構造は複雑で、高くそびえた城墙内にすでに初歩的城市化規格が現れており、城の北部は宮殿区の所在となっており、附近には攻玉工房があり、そして1986年にはいわゆる“祭祀坑”が発見され、地域色の鮮明な祭祀儀礼に用いる器物が大量に出土した。これにより、この遺跡が当時の王国の神廟であり宗教祭祀のセンターであり、また城墙の周囲の地区は、当時の一般の居住者の住居と墓地であったことが明らかとなった。高大な城墙・大量の祭祀用具、そして洗練された鑄造工芸の伝統と独特の芸術造形は、その発達した青銅文化と独特の文化特徴そして不可思議な世界観を十分に反映しており、成都平原青銅文化の最高峰である。

十二橋（金沙）文化は、四川盆地青銅時代中期の考古学文化であり、その年代はおおよそ商代後期から春秋時代である。これは、20世紀八十年代における成都市区十二橋遺跡の発見と発掘により認識されたもので、この遺跡では大型の高床式建築と大量の尖底陶器および卜甲などが発見され、その文化の風格は、三星堆遺跡とは明らかに異なっており、両者の間にはつながりもあるが、明らかに“断絶”が存在する。

成都西郊金沙遺跡は目下のところ、十二橋（金沙）文化における最も代表的な遺跡群であり、その盛行時期はおおよそ商代後期から春秋時代である。現在確認された分布面積は5平方km以上である。この区域内では、大型の建築基址・宗教祭祀活動区・一般民の居住地と墓地が発見されており、これらの居住民の社会構造がすでに厳格に階層分化された段階に進んでいたことを明示する。また金沙遺跡では、大量の精美な玉石器や金・象牙器などが出土しており、複雑な集落構造と厳格な社会文層化そして精美な祭祀儀礼器の存在から、それが十二橋文化時期の重要な中心的聚落であり、当時の社会政治・経済・宗教・文化のセンターであったことを証明している。この遺跡は当時の金沙王国の都邑の中心であり、金沙遺跡の発見と研究は、三星堆文明の去就の問題を究明するのに重要であるだけでなく、また成都平原青銅文化の中心が商代後期にすでに変遷し、金沙遺跡が当時の古蜀文明の中心として三星堆遺跡に取って代わったことを反映している。成都平原3000年の築城の歴史は、ここからさらに新たな幕開けとなるのである。三星堆遺跡と金沙遺跡を代表とする前期・中期の古蜀青銅文化は、長江上流地域における商周時代青銅文化の最高水準を体現しており、その独特にしてきらびやかな青銅文化は、中国の多元的な青銅文化の一翼を担っている。

春秋後期から、成都平原はその青銅時代の後期段階に入る。成都市中心地区に位置する商業街で、戦国前期のやや晚い時期に属する大型多棺合葬の船棺・独木棺墓葬が発見され、豊富な古蜀国戦国時代の考古資料が発掘された。その宏大な規模と独特な墓葬形制・儀礼建築、また豊富な副葬器物（大量の精美な陶・銅・漆・竹木器が出土し、そのうち漆器は形態が精美で、色彩が美しく、紋飾は複雑・精緻であり、四川地区の同時期の出土漆器にはあまり見られないものである）など、斬新な内容であり、古代巴蜀の歴史文化・葬送制度などの研究を深めるのに、重要な実物資料を提供してくれる。その初歩的研究から、この墓葬が古蜀国開明王朝の王族ないし蜀王本人の家族墓地であることが明らかとなった。その発見と研究は古蜀国開明王朝時期の歴史文化の様相・葬送習俗・宗教儀礼などの研究を最大限に推進することとなった。戦国後期（紀元前316年）に秦国により蜀王国が滅ぼされてから、

成都平原の青銅時代は消滅へと向かい、逆に鉄器を代表とする中原文化が古蜀地域の青銅文化に次第に強い影響をもたらすようになった。前漢前期には、古蜀地域は基本的に鉄器化過程を実現し、巴蜀地域は次第に中原文化の体系に編入される道へと入っていった。



郫県古城



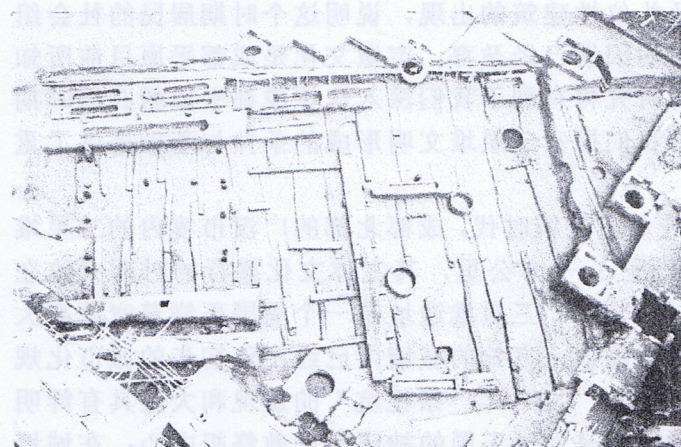
金沙宮殿址



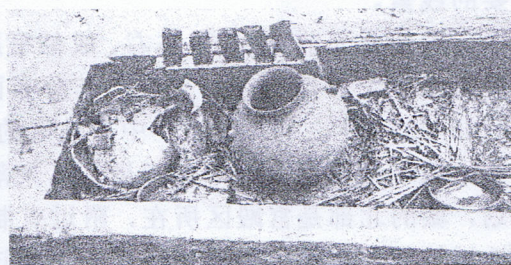
金沙出土金器



金沙出土象牙製品、象牙



商業街舟棺葬



商業街舟棺葬出土遺物

讲演② 中国西南地域、成都平原的铁器文化前史

成都文物考古研究所 王 毅

一. 序文

贵校与中方成都文物考古研究所、四川大学等单位于 2006 年度开始实施的中国西南地区早期铁器的研究与保护这一课题,已经实施一年多了。在这一年期间,我们双方开展了馆藏铁器考察,冶铁遗址的调查、试掘,出土铁器的技术保护实验等一系列的实质性的合作研究活动,取得了重大的学术成果。

成都平原早期铁器的研究与西南地区古代文明之间有着紧密的联系,铁器的发明作为划时代变革的代表性技术,深刻影响了人类发展的进程,它的出现剧烈地影响了西南夷地区古代族群原生态的发展方式。西南地区古代文化的研究离不开成都平原早期铁器的研究,成都平原早期铁器的研究是中国西南古代文化发展进程研究中一个重要的组成部分。

爱媛大学以村上恭通教授为首的学者们,长期以来致力于东亚铁器考古学研究,取得了令世人瞩目的成绩。他们的研究领域不仅涵盖了东亚各国古代冶铁遗址的调查、发掘与研究,更是包括铁质文物的技术保护处理、古代冶铁工艺技术复原与再利用等,这些研究极大地推进了东亚各国冶铁考古与出土铁器的保护技术水平的提高。为此,中方在与爱媛大学开展合作研究时,强调开展以冶铁遗址的考古调查、发掘为基础,以铁器的研究、分析和技术保护为手段的区域性的系统调查和综合研究。我们相信随着合作研究的深入,中国西南地区铁器的起源、发展、制作工艺、技术传统、冶炼规模、分布范围、贸易形式等具有重要意义的学术问题将日渐清晰。

二. 成都平原铁器出现以前的考古学文化体系。

成都平原作为长江上游的古代文明中心,从五千年以来就建立了从宝墩文化、三星堆文化、十二(金沙)桥文化至战国青铜文化连续发展的古蜀文化编年体系,它反映出成都平原的悠久历史和独特的古蜀文明体系。

距今 4700~3700 年的宝墩文化是成都平原目前可追溯最早的考古学文化,它主要分布于成都平原的西部或西南部,1996 年~2001 年新津宝墩、郫县古城、崇州双河、紫竹古城、温江鱼凫城、都江堰芒城、大邑盐店、高山古城等 8 座城址的发现,使我们对于成都平原新石器时代的历史文化面貌有了初步的认识,这些古城的面积在 60 万平方米~10 万平方米之间,巨大的夯土城墙和大型建筑群以及礼仪性建筑的出现,说明这个时期居民的社会组织结构与分层已经进入复杂化阶段,文明的因素已经孕育,宝墩文化是成都平原目前所知史前时期最早的新石器文化,它的发现与研究将有利于我们深入认识成都平原新石器时期居民的历史文化面貌和内涵,同时有助于我们探索三星堆文明形成的条件与基础提供了重要的线索。

约在公元前 3700 年左右,成都平原进入了青铜时代,成都北部的广汉市境内的三星堆遗址是这个时期的杰出代表,其分布面积近 3 平方公里,其主体文化盛行的时期大致在 3700~3150 年之间(相当于中原地区的夏商时期),三星堆遗址是一个周围环绕着宽厚高大夯土城墙规模巨大的中心都邑,其聚落结构复杂,高耸的城墙内已经出现初步的城市化规划,城的北部是宫殿区所在,附近有制玉作坊,1986 年“祭祀坑”的发现和大量具有鲜明地域特征祭祀礼仪用器的出土,表明该遗址还是当时王国的神庙和宗教祭祀中心;在城墙的周围地区则有当时普通居民的住所与墓地。高耸的城墙、大量祭祀用器以及精湛的铸造工艺传统和独特的艺术造型等充分反映出其发达的青铜文化和独特的文化特征以及奇异的审美世界,它代表了成都平原青铜文化的顶峰;

十二桥*(金沙)文化是四川盆地青铜时代中期的考古学文化,其年代约在商代晚期至

春秋，它是以 20 世纪八十年代成都市区十二桥遗址的发现与发掘而被认识的，该遗址发现了大型杆栏式建筑和大量尖底陶器以及卜甲等，其文化风格与三星堆遗址显示出迥然的差异，它们之间既有联系也有明显的“断裂”。

位于成都西郊的金沙遗址是目前十二桥（金沙）文化中最具有代表性的遗址群，它流行的时间大致在商代晚期至春秋时期，目前已经确认其分布面积在 5 平方公里以上。目前在该区域内发现了大型的建筑基址区、宗教祭祀活动区、普通居民点以及墓地，这显示出这些居民的社会结构已经进入严重分层的阶段，金沙遗址目前出土了大量精美的玉石器、金、象牙器等，复杂的聚落结构和严重的社会分层以及精美的祭祀礼仪用器的存在，表明它是十二桥文化时期的一个重要的中心聚落，是当时社会政治、经济、宗教和文化的中心，它是当时金沙王国的都邑中心，金沙遗址的发现与研究有利于认识三星堆文明的去向问题的探索，同时也反映出成都平原青铜文化的中心在商代晚期已经发生了位移，金沙遗址已经取代三星堆遗址成为这个时期古蜀文明的中心，成都 3000 年的建城史由此掀开新的篇章。以三星堆遗址和金沙遗址为代表的早、中期古蜀青铜文化代表了长江上游地区商周时期青铜文化的最高水平，其独特而灿烂的青铜文化构成了中国多元青铜文化中的一枝绚丽的奇葩。

从春秋晚期开始，成都平原就进入其青铜时代的晚期阶段，位于成都市中心地区商业街战国早期偏晚的大型多棺合葬的船棺、独木棺墓葬的发现与发掘，丰富了古蜀国战国时期的考古资料，其宏大的规模、独特的墓葬形制和礼仪建筑、丰富的随葬器物（如大量精美而丰富的陶、铜、漆、竹木器的出土，其中漆器形精美、色彩亮丽、纹饰繁缛而斑斓，为四川地区同时期出土漆器所罕见）等新颖的内容为我们进一步深入研究古代巴蜀的历史文化、丧葬制度等提供了重要的实物资料。初步的研究表明该墓葬是古蜀国开明王朝王族或蜀王本人的家族墓地。他的发现与研究将极大地推进了古蜀国开明时期的历史文化内涵、丧葬习俗以及古蜀国宗教礼仪制度等方面的研究。战国晚期（公元前 316 年）随着秦灭蜀，成都平原的青铜时代也随之消融，以铁器为代表的强势中原文化对古蜀地区青铜文化的影响也随之加剧，到西汉早期，古蜀地区基本上完成铁器化过程，巴蜀地区开始跨入了逐渐纳入中原文化体系的进程。

講演③ 成都平原における製鉄遺跡の調査成果とその意義

四川大学歴史文化学院考古学系 李映福

一、成都平原日中共同製鉄考古調査のいきさつ

2006年6月、愛媛大学法文学部と成都文物考古所は、共同研究の意向をもって協議を締結した。双方により、王毅を隊長とし、村上恭通・李明斌を副隊長、李映福を秘書長として、雲南・貴州・重慶などの考古学関連機関を協力単位とした。また、関連機関の学者に共同研究チームへの参加を要請した。そして三点の項目を立案した。まず九年間の共同研究計画を立てたこと、双方により館蔵鉄器の研究・製鉄遺跡の調査発掘・出土鉄器の技術保存処理・製鉄技術の復元・古代製鉄技術の再利用といった課題で、実質的な共同研究を行うこと、そして、成都平原・中国西南地域の鉄器研究・保護・利用に関する新しい学問体系を形成することを合意した。これに基づき、成都文物考古研究所等より、中国国家文物局へ日本愛媛大学と行う共同調査の申請報告を提出し、同年十月に、申請は国家文物局の批准を得た（批准文号[2006]1091）。

第一年度の共同調査は四段階にわたる。

第一段階は、まず成都平原における鉄器出土状況と製鉄遺跡の現状を理解するため、これから行う共同調査の計画を立てた。そして、2006年9月中旬に、成都文物考古研究所より7名の製鉄遺跡調査隊を組織し、邛崃市・蒲江县の両地区の文物管理所の協力の下、両地区の文物管理所所蔵鉄器を視察し、また両地の製鉄遺跡に対しても第一次の現地調査を行った。この調査により、邛崃、蒲江両地区内の製鉄遺跡の分布と保存の現状を理解するにいった。

第二段階は、2006年9月22日から10月3日の間で、日中双方で18名の共同研究チームを組織し、国家文物局の許可の下、成果の大きい研究活動を行った。この時には、両者で成都文物考古所・成都市博物館・邛崃市文管所、蒲江县文管所の所蔵鉄器を視察し、併せて邛崃市鉄屎壩・蒲江县古石山など十数か所の各時期の製鉄遺跡を視察した。この他、村上恭通教授、楊穎研究員をリーダーとして、鉄器保存研究チームを組織し、成都市出土の鉄器1点に対して保存実験を行い、成都平原出土鉄器の錆による腐食の主要原因や錆の除去処理・保存処理の基本的な方法について初歩的な認識を得た。

第三段階は、蒲江县内における数か所の重点的な製鉄遺跡の堆積状況・年代・性質を確認し、次の段階における共同調査の基礎を打ち立てた。また日中双方で組織した調査隊は、2007年1月16日から23日にも、蒲江县古石山・鉄牛村遺跡・長秋山鉍石採掘跡などの探査を行い、都江堰市・龍泉駅文物管理所所蔵の鉄器を視察した。

第四段階は、村上教授により四川省内および雲南省・貴州省において広範に出土の初期鉄器資料の視察がされ、また成都平原出土鉄器の保存処理も進められた。

二、主要な成果

日中隊はこれまでの文物調査の基礎上に、蒲江县に重点的に分布する製鉄遺跡に対して再度調査を進め、数か所の異なる時期の典型的な製鉄遺跡を確認した。以下の五か所である。古石山遺跡・鉄牛村遺跡・許鞋區遺跡・高炉山遺跡・鉄屎壩遺跡。

三. 主要意義

第一段階の共同研究は非常に重要な意義をもつ。主に以下のいくつかの点が挙げられる。

一つは、共同研究プロジェクトの実施を通じて、日本・中国の間に強い信頼関係を築いたことであり、今後のさらなる研究の推進のために重要な基礎を築いたといえる。この他、我々は初期鉄器が多く出土している、貴州省文物考古研究所・雲南省文物考古研究所・昆明市博物館・重慶市文物考古所など関連の考古研究機関と共同調査の協力関係を打ち立てている。

二つ目は、所蔵鉄器の保存や研究、蒲江県における製鉄遺跡の考古調査、レーダー探査の実施などであり、次の段階のより具体的で大規模な共同発掘に重要な基礎を提供することとなった。

三つ目は、所蔵鉄器の研究や製鉄遺跡の調査が、愛媛大学の学生にとってもよい実習・研究の機会となったことである。

四つ目は、今年度の共同研究が、成都平原における異なる時期の製鉄遺跡分布状況と異なる時期の製鉄炉の構造を、基本的に明らかにしたことである。また試験的鉄器保存により、成都平原出土の鉄器腐食の主要な原因を明らかにし、一連の経験済みとなった有効な保存技術を手にすることとなった。

五つ目は、この第一段階の成果が示すように、このプロジェクトを継続して進めるならば、重要な学術成果を得ることが明らかなことである。そのため、日中共同研究のさらなる拡大と深化を目指すならば、特に次の段階に成都平原の蒲江県鉄牛村・許鞋辺・古石山などの製鉄遺跡の共同考古発掘を実施することにより、このプロジェクトは必ず広い影響をもち、深い意義を有する学術成果となるであろう。

成都平原初期鉄器の考古学研究プロジェクトは、非常に重要な学術意義を具えており、国内外の広い注目を受ける研究領域となっている。その初期鉄器の研究と製鉄遺跡の考古発掘は、中国西南地域の製鉄および古代社会の発展史を究明するだけでなく、さらには成都平原の鉄器が中国西南地域・東南アジアに与えた影響、さらには日本の鉄器文化を研究する上での示唆、といった研究課題に重要な考古実物資料を提供することとなる。

四. 成都平原初期鉄器に関する歴史文献

『史記』卷一百二十九貨殖列伝：

蜀卓氏之先，趙人也，用鉄冶富。秦破趙，遷卓氏。卓氏見虜略，独夫妻推輦，行詣遷處，諸遷都虜少有余財，争与吏求近处，处葭萌。唯卓氏曰：“此地狹薄，吾聞汶山之下，沃野，下有蹲鴟，至死不飢。民工于市，易賈。”乃求遠遷。致之臨邛，大喜，即鉄山鼓鑄，運籌策，傾滇蜀之民。富至僮千人。田池射猎之樂，擬于人君。

『史記』卷一百二十九貨殖列伝：

“程鄭，山東遷虜也，亦冶鑄，賈椎髻之民，富埒卓氏，俱居臨邛。”

『漢書』卷二十八上：

“臨邛，仆千水東至武陽入江，過郡二，行五百一十里。有鉄官、塩官。”

『華陽国志』卷一巴志：

“昔在唐堯，洪水滔天。鯀功無成，聖禹嗣興，導江疏河，百川鑄修；封殖天下，因古九圉以置九州島。仰稟參伐，俯壤華陽，黑水、江、漢为梁州。厥土青黎。厥田惟下上。厥賦惟下中。厥貢璆・鉄・銀・鏤、罽、磬、熊、羆、狐、狸、織皮。于是四隩既宅，九州島攸同，六府孔修，庶土交正，底財賦，成貢中国。蓋時雍之化，東被

西漸矣。”

“其地，東至魚復，西至樊道，北接汉中，南極黔涪。土植五穀。牲具六畜。桑·蚕·麻·苧·魚·塩·銅·鉄·丹·漆·茶·蜜·靈龜·巨犀·山鷄·白雉·黃潤·鮮粉，皆納貢之。”

“宕渠縣 郡治。有鐵官。石蜜，山圖所採也。”

『華陽国志』卷二漢中志：

“沔陽縣 州治。有鐵官。有度水。水有二源：一曰清檢，二曰濁檢，并有魚穴。清水出鯿，濁水出鮒，常以二月八月取。蜀丞相諸葛亮葬定軍山。”

『華陽国志』卷三蜀志：

“蜀之為國，肇於人皇，與巴同囿。至黃帝，為其子昌意娶蜀山氏之女，生子高陽，是為帝嚳。封其支庶於蜀，世為侯伯。歷夏、商、周。武王伐紂，蜀與焉。其地東接於巴，南接於越，北與秦分，西奄峨嶓。地稱天府，原曰華陽。故其精靈，則井狼垂耀，江、漢遵流。『河圖括地象』曰：「岷山之精，上為井絡，帝以會昌，神以建福。」『夏書』曰：「岷山導江，東別為沱。」泉源深盛，為四瀆之首，而分為九江。其實，則有璧玉·金·銀·珠·碧·銅·鐵·鉛·錫·赭·堊·錦·繡·罽·氍·犀·象·氈·氍·丹·黃·空青之饒，滇·獠·寶·焚·僮僕六百之富。”

“〔赧王〕五年，儀與若城成都，周迴十二里，高七丈。郫城，周迴七里，高六丈。臨邛城，周迴六里，高五丈。造作下倉，上皆有屋。門置觀樓，射蘭。成都縣本治赤里街。若徙置少城。內城營廣府舍，置鹽鐵市官並長、丞。修整里闔，市張列肆，與咸陽同制。其築城取土，去城十里，因以養魚，今萬歲池是也。惠王二十七年也。城北又有龍堤池，城東有千秋池，城西有柳池，〔西北有天井池，津流徑通〕，冬夏不竭。其園囿因之。平陽山亦有池澤，蜀王漁畋之地也。”

“孝宣帝地節三年，罷汶山郡，置北部都尉。時又穿臨邛蒲江鹽井二十所，增置鹽鐵官。”

“臨邛縣 郡西南二百里。本有邛民。秦始皇徙上郡民實之。有布濮水，從布濮來合火井江。有火井，夜時光映上昭。民欲其火光，以家火投之，頃許，如雷聲，火焰出，通耀數十里。以竹筒盛其氣然之，可拽行終日不滅也。井有二水，取井火煮之，一斛水得五·鹽。家火煮之，得無幾也。有古石山，有石礦，大如蒜子。火燒合之，成流支鐵，甚剛。因置鐵官。有鐵祖廟祠。漢文帝時，以鐵、銅山賜侍郎鄧通。通假民卓王孫，歲取千匹。故王孫貲累巨萬億，鄧通錢亦布天下。王孫女文君，能鼓琴。時有司馬長卿者，臨邛令王吉與之游王孫家，文君因奔長卿。漢世，縣民陳立，歷巴郡、牂柯、天水太守，有異政。陳氏、鄭氏為大姓冠蓋也。”

“廣都縣 郡西三十里。元朔二年置。有鹽井、漁田之饒。大豪馮氏，有魚池、鹽井。江有魚漕梁。山有鐵礦。江西有安稻田，穿山崖過水二十里。漢時，縣人朱辰，字元燕，為巴郡太守，甚著德惠。辰卒官，郡獠民北送及墓。獠蜚鼓刀辟踊，感動路人。於是葬所草木頃許皆倣之曲折。迄今蜀人，莫不歎辰之德靈，為之感應。今朱氏為首族也。”

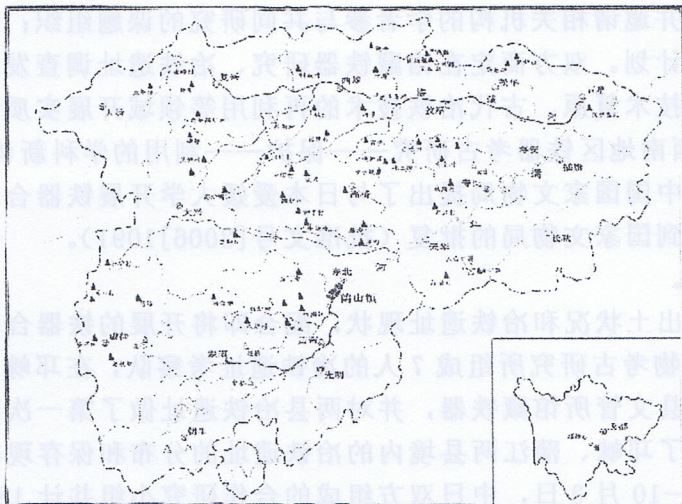
“武陽縣 郡治。有王喬、彭祖祠。蒲江大堰灌郡下。六水門有朱遵祠。山出鐵及白玉。特多大姓，有七楊、五李諸姓十二也。”

“臺登縣 有孫水，一曰白沙江，入馬湖水。山有磐石，火燒成鐵，剛利。『禹貢』「厥賦磐」是也。又有漆，漢末，夷皆有之，張疑取焉。”

『華陽国志』卷四南中志：

“夷人大種曰昆，小種曰叟，皆曲頭，木耳環，鐵裹結。無大侯王，如汶山、漢嘉夷也。夷中有桀、黠、能言議屈服種人者，謂之「耆老」，便為主。”

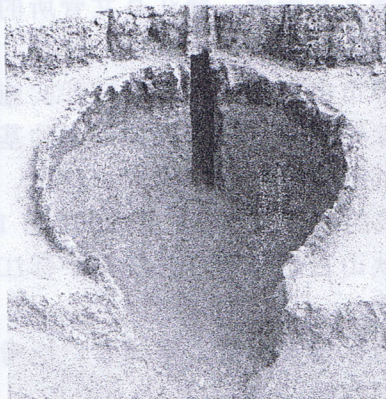
歴史時代の文献では、西南地域の鉄器の状況に関する記載は多く、ここでは、代表的な比較的古い時代のものを挙げるにとどめる。



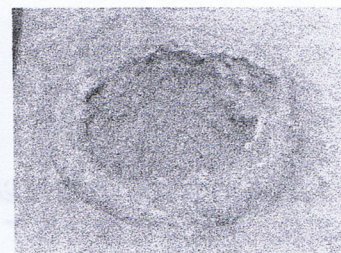
蒲江県製鉄遺跡分布図



各遺跡遠景



蒲江県製鉄遺跡各遺構



蒲江県製鉄遺跡各遺構および関連遺物

讲演③ 成都平原中日合作早期冶铁考古的发现及意义

四川大学历史文化学院考古学系 李映福

一. 成都平原中日合作冶铁考古始末

2006年6月,爱媛大学法文学部与成都文物考古所签订了意向性合作研究协议。双方商定组成以王毅为队长,村上恭通、李明斌为副队长,李映福为秘书长,云南、贵州、重庆等地相关考古机构为协力单位,并邀请相关机构的学者参与共同研究的课题组织;制订了三个阶段,共计九年的合作研究计划。双方商定在馆藏铁器研究、冶铁遗址调查发掘、铁器出土品的技术保护处理、冶铁技术复原、古代冶铁技术的再利用等领域开展实质性地合作研究,以期建立起成都平原、西南地区铁器考古研究——保护——利用的学科新体系。基于此,成都文物考古研究所等向中国国家文物局提出了与日本爱媛大学开展铁器合作研究的申请报告。同年十月,申请得到国家文物局的批复(批准文号[2006]1091)。

第一年度的合作研究分为四个阶段。

第一阶段,为了解成都平原铁器出土状况和冶铁遗址现状,配合即将开展的铁器合作研究项目,2006年9月中旬,成都文物考古研究所组成7人的冶铁遗址考察队,在邛崃、蒲江两县文管所的配合下,考察了两县文管所馆藏铁器,并对两县冶铁遗址做了第一次的实地考察。此次考察的收获在于摸清了邛崃、蒲江两县境内的冶铁遗址的分布和保存现状。

第二阶段,2006年9月22日—10月3日,中日双方组成的合作研究小组共计18人,以国家文物局的批复精神为指导,开展了富有成果的铁器合作研究活动。双方考察了成都文物考古所、成都市博物馆、邛崃县文管所、蒲江县文管所的馆藏铁器,并参观考察了邛崃县铁屎坝、蒲江古石山等十余处各时期的冶铁遗址。此外,以村上恭通教授、杨颖东为首的铁器保护研究小组还对成都市出土的一件铁器残件实施了技术保护实验,初步掌握了成都平原铁器锈蚀主要原因和除锈处理、技术保护处理的基本方法。

第三阶段,为确认蒲江境内几处重点冶铁遗址的堆积状况、年代、性质,为下一阶段的合作研究奠定基础,中日双方组成的联合考察队,于2007年1月16日—23日考察踏勘了蒲江县古石山、铁牛村遗址,长秋山古矿洞等,并观察了都江堰市、龙泉驿文管所馆藏铁器。

第四阶段,村上教授在四川省内以及云南省、贵州省广泛考察出土早期铁器资料;开展成都平原出土铁器的技术保护处理实验。

二. 主要收获

中日双主在原文物普查的基础上,重点对分布在蒲江县的冶铁遗址进行了复查,确认了几处具有代表性的不同时期的冶铁遗址。

第一,古石山遗址

第二,铁牛村遗址

第三,许鞋匾遗址

第四,高炉山遗址

第五,铁屎坝遗址

三. 主要意义

第一阶段的合作研究具有十分重要的意义,我们可以把主要收获概况为以下几点:

第一,通过合作研究项目的实施,中日双方建立起了互相信赖关系,为合作研究项目的进一步推进奠定非常重要的基础。我们还与大量出土早期铁器的贵州省文物考古研究所、

云南省文物考古研究所、昆明市博物馆、重庆市文物考古所等相关考古研究机构建立起了合作研究的协力关系。

第二，馆藏铁器的保护、研究和蒲江县冶铁遗址的考古调查、雷达探测的实施为下一阶段开展具体的、大规模的合作发掘提供了重要的基础。

第三，通过对馆藏铁器研究、冶铁遗址调查，也为贵校学生提供了考古实习与学习的机会。

第四、本年度的合作研究，基本搞清楚了成都平原不同时期冶铁遗址的分布规律和不同时期冶铁炉的结构。通过具体的铁器保护试验，基本清楚了成都平原出土铁器锈蚀的主要原因，并探讨出了一套行之我效的技术保护方法。

第五，第一阶段的成果明确告诉我们，如果该项目持续地开展下去，将会取得重大的学术成果，因此，我们坚信随着中日双方合作研究的进一步扩大和深化，特别是下一阶段中日双方在成都平原蒲江县铁牛村、许鞋边、古石山等冶铁遗址的合作考古发掘的实施，该项目最终一定会产生有广泛影响的、深刻意义的重大学术成果。

成都平原早期铁器考古研究项目具有十分重要的学术意义，是一个受到国内外广泛关注的重要研究领域。通过对成都平原出土早期铁器的研究和冶铁遗址的考古发掘，不仅可以究明中国西南地区冶铁及古代社会的发展史，甚至于可以为探讨成都平原铁器对中国西南地区、东南亚，甚至于对日本铁器文化的影响等课题研究提供重要的考古学实物资料。

四. 成都平原早期铁器的相关历史文献

《史记》卷一百二十九货殖列传：

蜀卓氏之先，赵人也，用铁冶富。秦破赵，迁卓氏。卓氏见虏略，独夫妻推輦，行诣迁处，诸迁虏少有余财，争与吏求近处，处葭萌。唯卓氏曰：“此地狭薄，吾闻汶山之下，沃野，下有蹲？，至死不饥。民工于市，易贾。”乃求远迁。致之临邛，大喜，即铁山鼓铸，运筹策，倾滇蜀之民。富至僮千人。田池射猎之乐，拟于人君。

《史记》卷一百二十九货殖列传：

“程郑，山东迁虏也，亦冶铸，贾椎髻之民，富埒卓氏，俱居临邛。”

《汉书·地理志》：

“临邛，仆千水东至武阳入江，过郡二，行五百一十里。有铁官、盐官。”

《华阳国志·巴志》卷一：

“昔在唐尧，洪水滔天。鲧功无成，圣禹嗣兴，导江疏河，百川蠲修；封殖天下，因古九圉以置九州岛。仰禀参伐，俯壤华阳，黑水、江、汉为梁州。厥土青黎。厥田惟下上。厥赋惟下中。厥贡璆、铁、银、镂、罍、磬、熊、罴、狐、狸、织皮。于是四隩既宅，九州岛攸同，六府孔修，庶土交正，底财赋，成贡中国。盖时雍之化，东被西渐矣。”

“其地，东至鱼复，西至僰道，北接汉中，南极黔涪。土植五穀。牲具六畜。桑、蚕、麻、苴，鱼、盐、铜、铁、丹、漆、茶、蜜，灵龟、巨犀、山鸡、白雉，黄润、鲜粉，皆纳贡之。”

“宕渠县 郡治。有鐵官。石蜜，山圖所採也。”

《华阳国志·汉中志》卷二：

“沔陽縣 州治。有鐵官。有度水。水有二源：一曰清檢，二曰濁檢，并有魚穴。清水出鯢，濁水出鮒，常以二月八月取。蜀丞相諸葛亮葬定軍山。”

《华阳国志·蜀志》卷三：

“蜀之為國，肇於人皇，與巴同圉。至黃帝，為其子昌意娶蜀山氏之女，生子高陽，是為帝嚳。封其支庶於蜀，世為侯伯。歷夏、商、周。武王伐紂，蜀與焉。其地東接於巴，南接於越，北與秦分，西奄峨嶓。地稱天府，原曰華陽。故其精靈，則井狼垂耀，江、漢遵

流。《河圖括地象》曰：「岷山之精，上為井絡，帝以會昌，神以建福。」《夏書》曰：「岷山導江，東別為沱。」泉源深盛，為四瀆之首，而分為九江。其實，則有璧玉，金、銀、珠、碧、銅、鐵、鉛、錫、赭、堊、錦、繡、麝、鼈、犀、象、氈、氍，丹、黃、空青之饒，滇、獠、賁、僮僕六百之富。”

“（赧王）五年，儀與若城成都，周迴十二里，高七丈。郫城，周迴七里，高六丈。臨邛城，周迴六里，高五丈。造作下倉，上皆有屋。門置觀樓，射蘭。成都縣本治赤里街。若徙置少城。內城營廣府舍，置鹽鐵市官並長、丞。修整里閭，市張列肆，與咸陽同制。其築城取土，去城十里，因以養魚，今萬歲池是也。惠王二十七年也。城北又有龍堤池，城東有千秋池，城西有柳池，（西北有天井池，津流徑通），冬夏不竭。其園囿因之。平陽山亦有池澤，蜀王漁畋之地也。”

“孝宣帝地節三年，罷汶山郡，置北部都尉。時又穿臨邛蒲江鹽井二十所，增置鹽鐵官。”

“臨邛縣 郡西南二百里。本有邛民。秦始皇徙上郡民實之。有布濮水，從布濮來合火井江。有火井，夜時光映上昭。民欲其火光，以家火投之，頃許，如雷聲，火焰出，通耀數十里。以竹筒盛其氣然之，可拽行終日不滅也。井有二水，取井火煮之，一斛水得五鹽。家火煮之，得無幾也。有古石山，有石礦，大如蒜子。火燒合之，成流支鐵，甚剛。因置鐵官。有鐵祖廟祠。漢文帝時，以鐵、銅山賜侍郎鄧通。通假民卓王孫，歲取千匹。故王孫貲累巨萬億，鄧通錢亦布天下。王孫女文君，能鼓琴。時有司馬長卿者，臨邛令王吉與之游王孫家，文君因奔長卿。漢世，縣民陳立，歷巴郡、牂柯、天水太守，有異政。陳氏、鄭氏為大姓冠蓋也。”

“廣都縣 郡西三十里。元朔二年置。有鹽井、漁田之饒。大豪馮氏，有魚池、鹽井。江有魚漕梁。山有鐵礦。江西有安稻田，穿山崖過水二十里。漢時，縣人朱辰，字元燕，為巴郡太守，甚著德惠。辰卒官，郡獠民北送及墓。獠蠻鼓刀辟踊，感動路人。於是葬所草木頃許皆倣之曲折。迄今蜀人，莫不歎辰之德靈，為之感應。今朱氏為首族也。”

“武陽縣 郡治。有王喬、彭祖祠。蒲江大堰灌郡下。六水門有朱遵祠。山出鐵及白玉。特多大姓，有七楊、五李諸姓十二也。”

“臺登縣 有孫水，一曰白沙江，入馬湖水。山有礬石，火燒成鐵，剛利。《禹貢》「厥賦礬」是也。又有漆，漢末，夷皆有之，張寔取焉。”

《華陽國志·南中志》卷四：

“夷人大種曰昆，小種曰叟，皆曲頭，木耳環，鐵裹結。無大侯王，如汶山、漢嘉夷也。夷中有桀、黠、能言議屈服種人者，謂之「耆老」，便為主。”

历史时期文献对西南地区铁器情况记载颇多，此处仅选部份有代表性的早期文献。

講演④ 長江三峡地区出土の初期鉄器と研究成果

重慶市文物考古所 離后曦

一. 三峡地区東周～六朝鉄器の考古発見

三峡地区発見の東周時代から六朝時代までの鉄器は、すでに発表された資料と筆者収集の未発表資料から統計を取ると、おおよそ 600 点以上にのぼる。その発見状況を概観するならば、大きく三つの段階に分けられる。

第一段階：1949 年以前。断片的な発見の時期である。グラハム（華西大学（四川大学の前身）博物館館長）により重慶市区曾家岩求精中学校で磚室墓が調査され、小量の鉄器を含む副葬品が出土した。これが三峡地区において最初に考古発掘で出土した鉄器である。衛聚賢・郭沫若・常任俠らによる重慶市江北培善橋付近の調査では、磚室墓 11 基が発掘され、一部鉄器が出土している。

第二段階：1949 年から 1992 年の、三峡工程文物保護工作が正式に始まる以前。小量の発見時期である。そのうち巴県冬笋壩出土の戦国～両漢鉄器は、巴蜀鉄器の研究に重要な意義をもつ。また、峡江東部地区では秭帰柳林溪遺跡の春秋鉄器や、宜昌前坪の戦国～両漢鉄器を代表とする考古発見があり、楚国の初期鉄器の起源と三峡東部の鉄器使用状況の研究に、重要な意義をもつ。

第三段階：1992 年の三峡工程文物保護工作の始まりから現在まで。鉄器の大量発見の時期である。この段階に発見された鉄器は数量だけでなく種類も豊富で、時代・地域分布も比較的広範に及ぶ。

二. 三峡地区東周～六朝鉄器の考古学研究の概要

これまで、当該地区における東周時代から六朝時代までの鉄器研究は、明らかに不十分であり、体系的・全面的な研究が欠けていた。

宋代の黄魯直・陸遊（注 1）・洪適（注 2）・趙明誠などの学者により、巫山県出土の漢代鉄牢盆についてそれぞれ記述されたことがあるが、表面にある銘文についての識別と研究であり、先人の初期鉄器に対する最も早い個別研究であった。

黄展岳は、その二篇の鉄器に関する論文において、鄂西三峡を含む地域で出土した初期鉄器について論述しており、三峡の鉄器を検討する文章として重要な意義をもつ（注 3）。

楊権喜は、楚国で最も早く鉄器を使用した地域を検討し、三峡東部地区における鉄器の考古発見状況を詳しく紹介している（注 4）。

蒋曉春は、三峡地区両漢時代の農業に関する論文において、漢代の鉄製農業生産工具について紹介を行い、農具の具体的な作用についても分析を進めている（注 5）。

楊華は、「論三峡地区春秋戦国時代冶鉄業的發展」において、三峡東部・西部地区の鉄器発見状況を詳しく紹介している（注 6）。

三峡地域の鉄器製作技術の方面については、湖北秭帰県廟坪遺跡 8 号墓で出土した戦国中後期の銅格鉄劍が専門家により金相鑑定された。后徳俊は分析結果から、この劍は塊鍊鉄を素材とし、反復鍛打して製作されたものと認識した。

三. 三峡地区東周～六朝鉄器の発展と特徴

三峡地区の東周時代から六朝時代の鉄器は種類が豊富で、中国の他の地域で見られる大多数の鉄器が三峡でも発見されている。鉄器の数量も膨大であり、最も多いのが前漢時代から後漢前期の段階のものである。

その発展過程を総合的に考察するならば、明らかに三つの大きな発展段階のあることが分かる。

第一段階は、春秋中期から前漢初期までである。これは三峡地区鉄器の発生と初步発展の段階である。この段階はさらに春秋時代と戦国・前漢初期の二時期に分けられ、それぞれ楚系鉄器と巴系鉄器の起源・発展の段階を代表する。

第二段階は、前漢時代から後漢前期である。この段階は三峡地区初期鉄器発展の最盛期である。この後の農耕社会における鉄器生産・使用の基盤を基本的に打ち立てた。この時期の鉄器種類は、社会生産と生活の各領域にほぼ及んでおり、第一段階と比較すると、農業生産工具の占める割合がやや減り、兵器・飲食炊煮器の比率が次第に増加する。

第三段階は、後漢中後期から両晋南北朝時代である。この時期は三峡鉄器の安定した発展時期であり、さらに後漢中後期と六朝の二時期に分けられる。

後漢中後期は、鉄器の種類にやや増加が見られ、日常生活における鉄器の使用が日増しに普遍的なものとなっていく。このとき、兵器の占める割合が明らかに上昇する。考古発見による六朝時代の農業生産工具は非常に少なく、兵器が全ての鉄器のおおよそ半分の割合を占めている。また女性の墓葬で鉄剪を副葬することが、一種の普遍的な現象となっている。

四．三峡地区初期鉄器と鉄器の中国南方地域における起源

春秋時代の、楚国の鉄器が各地で発見されている。楚国は中国でも当時鉄器生産と使用における重要な地点であった。同時に長江流域と南方地域の鉄器伝統の源流である。

近年、三峡地区で発見された春秋鉄器は日増しに増加している。これまで当該地区で鉄器の発見された地点には、湖北秭帰柳林溪・張家坪・茅寨子灣・宜昌上磨垸・重慶巫山藍家寨等の遺跡がある。

三峡地区で発見された初期鉄器は、目下のところ、最も早くて春秋中期の後段まで遡る。これらの鉄器は瞿塘峡以東の三峡地区に主に集中しており、発見地点の文化性質からみて、比較的典型的な楚文化に属している。三峡地区発見の春秋鉄器は、すでに楚国春秋鉄器の数量の過半数を占めている。そのため、三峡地区は楚国の初期鉄器生産の最も重要なセンターであったと考えられる。

五．巴系統鉄器と東西の差異

三峡西部地区の鉄器は、最も早くは戦国中期の段階に出現している。その生産と使用の源流は二つ考えられる。すなわち楚国と秦国である。ただし楚文化の影響がより強い。その伝播路線は峡江ルートと北方ロードに分かれる。この二つの鉄器伝播ルートは三峡地区で交わり、三峡西部地域における鉄器生産と発展を促すこととなった。

三峡西部地区の鉄器は、多くが秦・楚の形態と近い、あるいは同じものである。ただし、長い発展を経て、独自の文化伝統と結びつき、一定の地方的特色を形成した。これらの鉄器をとりあえず“巴系鉄器”と称しておく。

巴系鉄器は、主に双耳釜・単耳釜・束頸釜・双耳釜・璜形飾・烟荷包式斧（鉞）・柳葉形劍などがある。これらの鉄器は、一般に巴蜀文化中の同類銅器から発展してきたものであり、比較的強い巴文化色をそなえている。巴系鉄器は主に戦国時代から前漢時代に見られ、数量は必ずしも多くはなく、一般に中原系の鉄器と共存する。

六．鉄器組成の差異と変化

三峡地区の春秋～戦国前期の鉄器は、多くがオープンサイトから発見され、その後はほとんどが墓葬から発見される。

春秋時代の各遺跡出土の鉄器では常に鍤が見られ、よく見られる組成は鍤・斧（鑿）・削刀・刀となっている。

戦国から前漢初期では、瞿塘峡以東の三峡地区出土鉄器はなお鍤を主とする。三峡西部の奉節・雲陽出土の鉄器は斧・鑿を主とする。さらに西寄りの涪陵鎮安遺跡の各墓葬では削刀を主な副葬品とする。冬筭壩では二種類あり、一方の墓葬は削刀、一方の墓葬は斧を出土し、基本的に両者は同時には出土しない。

前漢時代から後漢前期では、峡江東部の宜昌前坪墓地と上記の冬筭壩墓地の副葬品組成状況は同じであり、あるいは両者に何らかの関係のあることを暗示しているのかもしれない。峡江西部地区の副葬鉄器の組成は多様で、各墓地でも完全に同じではない。老鵝冲墓地では斧・劍・釜あるいは鋤・斧・劍といった組成がよく見られる。冬筭壩墓でよく見られる組成は削刀と釜である。

後漢中後期には、墓葬では鉄釜が基本的に消失し、各墓地で刀・劍などの兵器を副葬するようになることが、顕著な特徴である。ただし、三峡東部地区では、墓葬で鉄釜が出土するのは非常に少なく、宜昌前坪に見られるような削刀ないし削刀・刀の両種が基本組成であるが、三峡西部地区では釜を副葬するのが一般的となっている。

三国時代では、涂井崖墓の副葬品が刀・釜を主とし、匯南墓群では刀を主とする。両晋南北朝時期に至ると、墓葬では主に鉄刀を副葬し、また中には鉄剪を副葬するものもあり、おそらく被葬者の性別と関係があらう。

七．三峡農業と鉄農具

三峡地区の鉄農具には、主に双・鏹・鍤・鋤・犁・鎌などの数種類があり、そのうち鍤が数量の最も多い農具の一つである。

農具の種類と数量からみると、三峡地区では主に鍤を起土工具として使用し、鋤も同じ作用を兼ねるであろう。犁は非常に少ない。こういった状況は、この地区が山地が多く旱地であることと関係があらう。

峡江東部地区の鉄農具は、東周時代の鉄器の中で一貫して主導的地位を占め、鉄器の生産は農業活動の需要と密接に絡まりながら行われたと考えられる。

三峡西部地区の鉄器は戦國中後期より見られるようになり、秦が巴蜀を滅ぼした後、当地で農業生産を推進していったことと一定の関連があらう。三峡西部における鉄農具の大量出現は、前漢前期以後まで継続する。この変化と文化変遷の時間の流れが軌を一にしていることは、偶然ではなかろう。前漢以来、中央政府は農業生産を発展させる一連の措置を取った。また自然環境も三峡地区の農業に大きく影響したであろう。これにより、鉄農具の製作と使用はさらに広範なものになっていく。

前漢時代以後、三峡地区出土の鉄器は次第に減少していく。各種兵器と飲食炊煮器がやや多くなる。この状況は、人々の葬送観念の変化を一面で反映しているであろう。また一方では、生産関係に大きな変革があったのかもしれない。

八．製鉄遺跡の考古発見

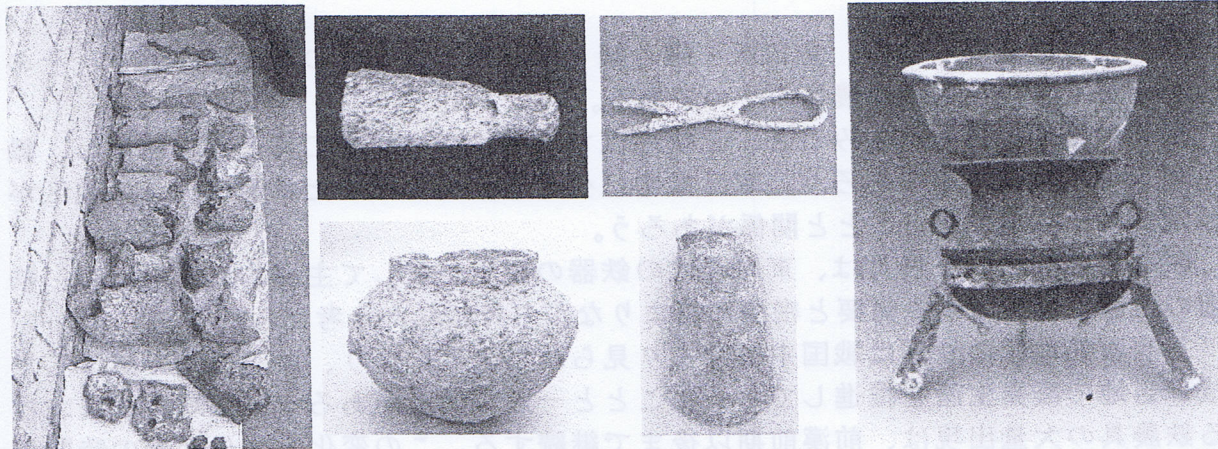
三峡地区の東周時代から前漢時代の鉄器は、その数量は多いものの、冶鑄遺跡の

発見は多くない。これまでのところ、宜昌上磨埡遺跡・巫山龍溪遺跡・宜昌前坪王家溝遺跡・雲陽旧県坪遺跡・豊都玉溪坪など五か所で、製鉄と関連のある考古発見が知られる。

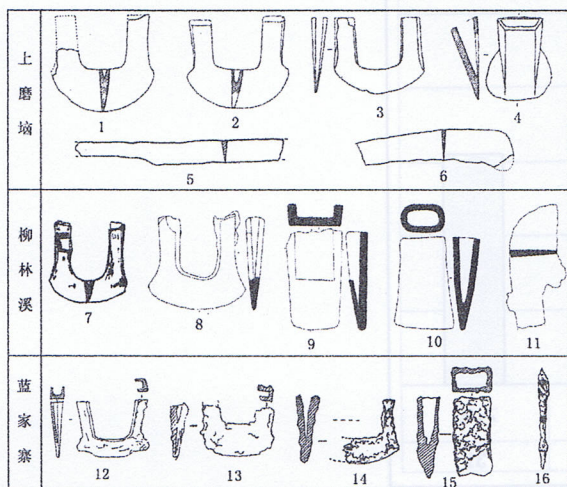
上述の考古発見からみる限りでは、保存の良好な窯炉はなく、当該地区における古代製鉄業の工芸技術を完全に復元するのは難しい。この他、鉱源の調査や鉱冶遺跡の発見は、目下皆無に近く、研究は不十分である。

【文 献】

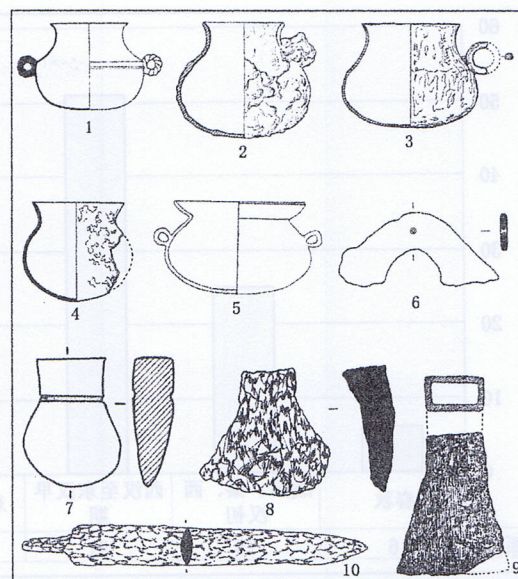
- 注1 陸遊『渭南文集・入蜀記』巻四十八。
注2 洪適『隸統』巻三、上海古籍出版社四庫全書影印本、1987年版。
注3 黄展岳「關於中国開始冶鉄和使用鉄器的問題」『文物』1976年8期。
黄展岳「試論楚国鉄器」『湖南考古輯刊』第2集、1984年。
注4 楊権喜「試論楚国鉄器の使用和発展」『江漢考古』2004年第2期。
注5 蒋曉春「三峡地区両漢時期農業発展状況初探」『四川大学学報』
(哲学社会科学版)2004年第5期。
注6 楊華「論長江三峡地区春秋戦国時期冶鉄業の発展—兼論楚国对巴蜀地区冶鉄業的影響」『重慶師範大学学報(哲学社会科学版)』2005年第4期。



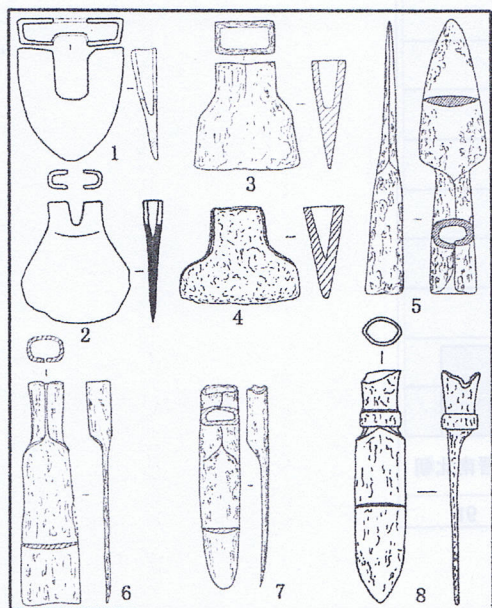
重慶市出土鉄関連遺物



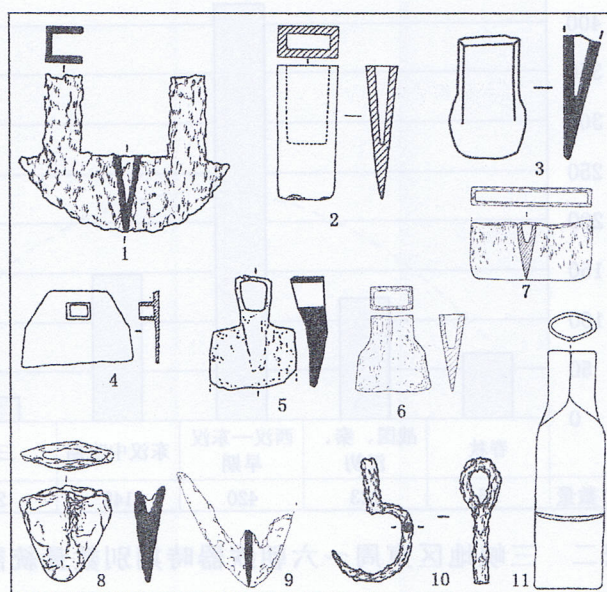
图一 三峡东部地区出土春秋时代铁器



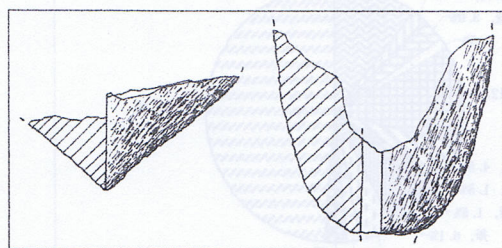
图二 巴系铁器典型器物



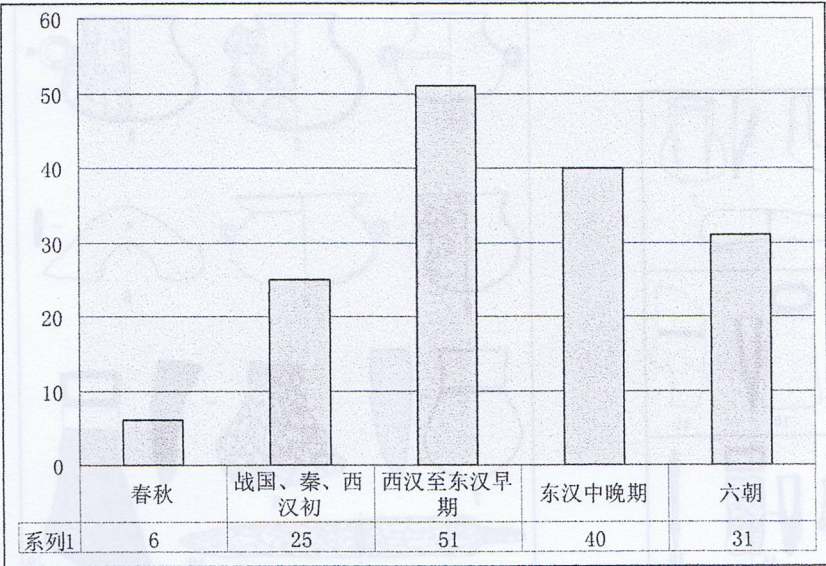
图三 三峡地区出土的地方铁器



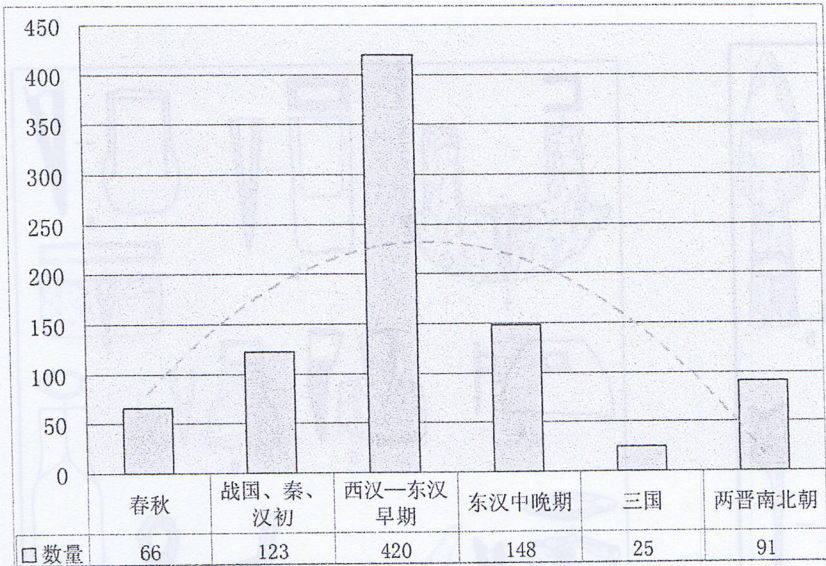
图四 三峡地区出土各种农具



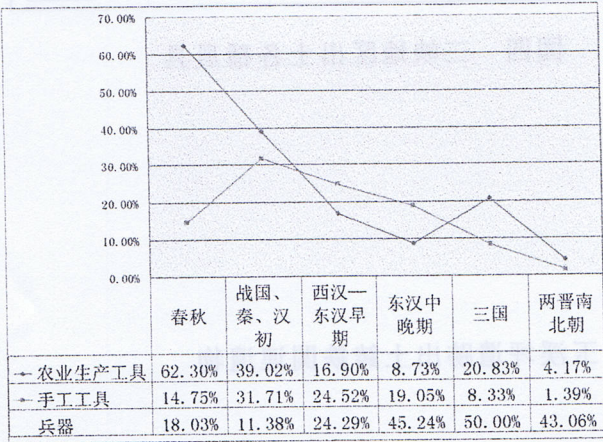
图五 玉溪坪遗址出土铸铁関連遺物



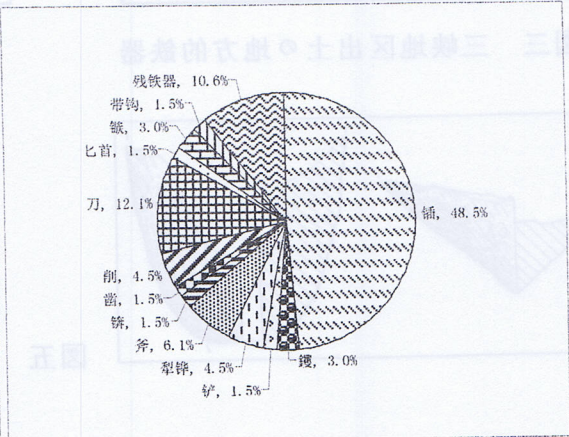
表一 鉄器発見地点時期別数量統計表



表二 三峡地区東周～六朝鉄器時期別数量統計表



表三 三種主要鉄器比率の時期的推移表



表四 春秋時代鉄器数量パーセンテージ表

讲演④ 长江三峡地区出土的早期铁器与其研究成果

重庆市文物考古所 邹后曦

一. 三峡地区东周至六朝铁器的考古发现

三峡地区考古发现的东周至六朝铁器, 据已发表资料和笔者所收集的部分未发表资料统计, 约有近 600 余件。纵观这一地区东周至六朝铁器的考古发现, 大约可以分为三个大的阶段。

第一阶段: 1949 年前。此阶段属于零星发现时期。葛维汉在重庆市区曾家岩求精中学校内清理砖室墓, 出土包括少量铁器在内的随葬品, 这是三峡地区第一次考古发掘出土的铁器。卫聚贤、郭沫若、常任侠等在重庆市江北培善桥附近调查、清理砖室墓 11 座, 亦有部分铁器出土。

第二阶段: 1949 年~1992 年三峡工程文物保护工作启动前。此阶段属于少量发现时期。其中巴县冬笋坝发现的战国至两汉铁器, 对于研究巴蜀铁器具有重要意义。而峡江东部地区以秭归柳林溪遗址的春秋铁器、宜昌前坪的战国至两汉铁器为代表的考古发现, 对于研究楚国早期铁器的起源和三峡东部铁器的使用情况具有重要作用。

第三阶段: 1992 年三峡工程文物保护工作启动至今。此阶段属于铁器大量发现时期。这一阶段发现的铁器不仅数量多, 而且种类丰富, 时代和地区分布也较广泛。

二. 三峡地区东周至六朝铁器的考古研究概况

迄今为止, 三峡地区东周至六朝铁器的研究还显得比较薄弱, 缺少系统的、全面的研究。

宋代黄鲁直、陆游、洪适、赵明诚等人就巫山县廨内的汉代铁牢盆分别做过记述, 并就其上的铭文做了辨识和研究。这是所见前人对早期铁器最早的个案研究。

黄展岳在其两篇专论铁器的文章中, 论述了包括鄂西三峡等地区出土的早期铁器, 不失为三峡铁器探索文章的重要篇章。

杨权喜探讨了楚国最早使用铁器的地区, 并详细介绍了三峡东部地区早期铁器的考古发现情况。

蒋晓春在一篇有关三峡地区两汉时期的农业的文章中, 对两汉时期的铁质农业生产工具进行了介绍, 并分析了各农具的具体功用。

杨华在《论三峡地区春秋战国时期冶铁业的发展》一文中, 详细介绍了三峡东部和西部地区铁器的发现情况。

三峡铁器铸造技术方面, 专家们曾对湖北秭归县庙坪遗址 M8 出土的战国中晚期铜格铁剑进行了金相分析。后德俊据分析结果认为, 该剑是以块炼铁为原料、经过反复锻打后制造而成的。

三. 三峡地区东周至六朝铁器的发展与特征

三峡地区东周至六朝时期铁器的种类丰富, 中国其他地区所能见到的大多数铁器在三峡都有发现。铁器的数量庞大, 最多的是西汉至东汉早期阶段。

综合考察三峡地区东周至六朝铁器的发展历程, 可以明显地划分为三个大的发展阶段。

第一阶段为春秋中期至西汉初年。这是三峡地区铁器起源和初步发展的阶段。此一阶段又可以分为春秋、战国至西汉初年两小段, 分别代表着楚系铁器和巴系铁器的起源和发展阶段。

第二阶段为西汉至东汉早期。这一阶段是三峡地区早期铁器发展的鼎盛时期。基

本奠定了此后农耕社会铁器生产和应用的基础。此期铁器的种类几乎涵盖了社会生产和生活的各个领域,和第一阶段比较,农业生产工具所占比例减小,兵器、饮食炊煮器比例渐增。

第三阶段为东汉中期至两晋南北朝时期。此期是三峡铁器的平稳发展时期,又可以进一步划分为东汉中期、六朝两个小段。

东汉中期,铁器的种类略有增加,日常生活中使用铁器日益普遍。此时,武器所占比例上升明显。考古发现六朝农业生产工具很少,兵器则占到了所有铁器的约一半的比例。在女性墓葬中随葬铁剪成为一种较普遍的现象。

四. 三峡地区早期铁器与铁器在中国南方地区的起源

春秋时期,楚国铁器在多处地点均有发现。楚国是中国当时铁器生产使用的一个重要中心,同时也是长江流域和南方地区铁器传统的源头。

近年来,随着三峡地区发现的春秋时期铁器日益增多。迄今这一地区发现春秋铁器的地点有湖北秭归柳林溪、张家坪、茅寨子湾、宜昌上磨垸,重庆巫山蓝家寨等遗址。

三峡地区目前发现的早期铁器,最早可以达到春秋中期偏晚阶段。这些铁器主要集中在瞿塘峡以东的三峡地区,从发现点的文化性质看,均属比较典型的楚文化。三峡地区发现的春秋铁器,占已发现楚国春秋铁器数量的一半以上,可见,三峡地区又是楚国早期铁器生产的最重要的中心。

五. 巴系铁器与东西差异

三峡西部地区的铁器,最早出现于战国中期阶段。三峡西部地区铁器的产生和使用源头应当有两个:楚国和秦国。但楚文化的影响更强烈一些。其传播路线分别是峡江通道和北方通道。这两条铁器的传播路线在三峡地区交汇,促成了三峡西部地区铁器的产生和发展。

三峡西部地区的铁器,多数与秦楚等国的形制相近或相同。但是,经过长时期的发展,它也结合了自身的一些文化传统,形成了一定的地方特色。这类铁器,我们暂且将其称为“巴系铁器”。

巴系铁器主要有双耳釜、单耳釜、束颈釜、双耳釜、璜形饰、烟荷包式斧(钺)、柳叶形剑等。这些铁器,一般均是从巴蜀文化中的同类铜器中演变而来,具有比较强烈的巴文化色彩。巴系铁器主要见于战国至西汉,数量并不太多,它一般与中原系铁器共存。

六. 铁器组合的差异与变化

三峡地区的春秋至战国早期铁器,大多数发现于遗址中;此后,多数铁器发现于墓葬中。

春秋时期各遗址出土铁器几乎都少不了锛,铁器的常见组合为锛、斧(钺)、削、刀。

战国至西汉初期,瞿塘峡以东三峡地区出土的铁器仍以锛为主。三峡西部的奉节、云阳出土铁器主要以斧、钺为主。而更靠西的涪陵镇安遗址各墓以削为随葬品;冬笋坝则有两种,一些墓出削,一些墓葬出斧,但两者基本上不同出。

西汉至东汉早期,峡江东部的宜昌前坪墓地与上期的冬笋坝墓地随葬品组合情况相同,或许暗示了两者间的某种联系。峡江西部地区随葬铁器的组合多样,各墓地也不完全相同。老鹄冲墓地常见斧、剑、釜,锄、斧、剑等组合;冬笋坝墓地常见的组

合是削、鏠。

东汉中期，墓葬中铁鏠基本消失，各墓地中随葬刀、剑等武器成为突出的特征。但在三峡东部地区，墓葬中很少出土铁釜，如宜昌前坪墓地有削和削、刀两种基本组合。而在三峡西部地区，随葬釜则成为一种常态。

三国时期，涂井崖墓随葬品以刀、釜为主，而汇南墓群则以刀为主。到两晋南北朝时，墓葬中主要随葬铁刀，有的随葬铁剪，可能与墓葬主人的性别有关。

七. 三峡农业与铁农具

三峡地区的铁农具主要有锸、耒、铲、锄、犁、镰等几种，其中锸是数量最多的一种农具。

从农具的种类和数量看，三峡地区主要使用锸做起土工具，锄可能也兼具这一功能，而犁却很少见。这种情况应当与该地区多山地和旱地有关。

在峡江东部地区铁农具在东周铁器中一直占有主导地位，铁器的生产是紧紧围绕农业需求进行的。

三峡西部地区铁器始于战国中晚期，可能与秦灭巴蜀后，在当地推行农业生产有一定的关系。三峡西部铁农具的大量出现，一直要到西汉早期以后。这一变化与文化转变间的时间同步，决不是偶合。西汉以来，中央政府采取了一系列的措施发展农业生产，自然也对三峡地区产生了较大影响，也使铁农具的制作和使用更加广泛。

西汉以后，三峡地区出土的铁农具日益减少，而各种武器和饮食炊煮器有较多增加。这种情况，一方面反映了人们丧葬观念的变化；另一方面，或许暗示了生产关系的巨大改变。

八. 冶铁遗迹的考古发现

三峡地区东周至西汉时期的铁器数量多，但发现的冶铸遗迹不多。目前为止，所知有宜昌上磨埡遗址、巫山龙溪遗址、宜昌前坪王家沟遗址、云阳旧县坪遗址、丰都玉溪坪等5处与冶铁业相关的考古发现。

仅就上述的考古发现看，缺少保存比较好的窑炉，难以完整复原该地区古代冶铁业的工艺技术。另外，在矿源调查和矿冶遗址的发现上，目前还几乎为零，更显研究的薄弱。

コラム 四川の自然地理と鉄器の伝播

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター助教 佐々木 正治

中国四川省は、中国大陸内陸部、長江上流域にあたり、北緯 $26^{\circ}03' \sim 34^{\circ}19'$ 、東経 $97^{\circ}21' \sim 110^{\circ}12'$ に位置する。東部は丘陵地帯に囲まれた四川盆地、西部はチベットへと連なる山岳地帯で、省内の70%が標高1000m以上の高地となっている。この地勢がさらに多数の河川により区分され、さらに標高差とあいまって、複雑多様な自然地理環境をもたらし、様々な物産・資源が各地で産出する。人口87,250,000人(2004年)を擁し、漢民族・彝族・チベット族・羌族・ミャオ族など53の民族が、各地に居住する。

このような自然環境と豊かな物産から四川は古来“天府の国”と称されてきた。また近年では、九寨溝・黄龍、峨眉山・樂山大仏、青城・都江堰、パンダ保護区といった自然・文化世界遺産が多数登録されているほか、多くの寺廟・博物館・公園などに、多くの観光者が訪れる。

そんな四川であるが、歴史も古い。秦始皇帝の中国統一(紀元前221年)以前、いわゆる巴蜀文化(巴は現在の重慶、蜀は成都に当たる)が栄えた。有名な三星堆文化や、近年発見された金沙遺跡(ともに殷周時代)で発見された数々の精美な青銅器・玉器・象牙は、四川の歴史認識を大きく変えたといつてよい。重慶三峡地区(重慶は1997年に国の直轄市となり四川から分離)では三峡ダム建設に伴う大規模な発掘で、戦国時代巴国の王墓・貴族墓が続々と発見され、成都平原でも蜀国王墓が発見されている。近年発見された蜀王墓は、20mに及ぶ楠木を縦に割って割り抜いたいわゆる舟棺葬で、驚くべき巨大さである。

そんな巴蜀文化は、基本的に青銅器の文化であり、鉄器は漢民族が巴蜀を征服してから四川へと伝わる。戦国時代後期に巴と蜀の内紛に乗じて秦国が攻め入り、巴・蜀王を廃して秦国から官僚を派遣して統治をすすめる。その後、岷江の洪水に悩まされていた成都平原では、巨大な水利施設である都江堰を建造する。この建設のために秦国から鉄器がもたらされる。そして灌漑網が設置され、中原式の農業が始まると、いよいよ鉄製農具も増加・普及し、古い青銅文化は姿を消していく。

こういった漢民族の勢力拡大は、西部の山岳地帯にも及ぶが、チベット系の羌族を中心に多民族が居住する四川西部山岳地帯には、銅柄鉄剣を代表とする特異な金属器文化が生まれた。これは、はるか西方から東伝し新疆へと至った騎馬民族系の短剣文化が、南へ流れ、この地に至った

ものであろう。さらにこの銅柄鉄剣の文化は、雲南・貴州の高原地帯へと伝わる。滇国（雲南）・夜郎国（貴州）といったいわゆる西南夷の人々は、銅柄鉄刃の様々な利器を作り出し、極めて特異な文化を生み出した。この四川西部から雲貴高原に至る独特の鉄器文化の担い手は、冒頭で触れた多くの少数民族の祖先に当たる人々であろう。

しかし雲南の“滇王之印”（漢王朝から王に封ぜられて下賜された印綬、日本出土“漢倭奴国王”印と比較される）が示すように、漢王朝がこの地に進出して、当地の首領を王に封じて支配を進めていく。四川はその前線基地として、漢王朝において大きな役割を担うこととなる。四川各地に鉄官を設置し、政府の主導で農業・戦争に用いられる鉄器を大々的に生産し始めたのである。

古代四川の鉄器は、民族・政治・経済など人々の様々な活動を反映する遺物といってよい。また製鉄技術もそれに応じて一様でないと考えられる。その四川を中心とする中国西南地域の鉄器文化を解明したならば、常に鉄器の伝播の在り方が問題として取り上げられる東アジアの歴史の理解に、新たな視点をもたらすことになるであろう。

MEMO

東アジア古代鉄文化研究センター設立記念

国際シンポジウム

—中国西南地域の鉄から古代東アジアの歴史を探る—

2007 年 10 月 27 日

主 催 東アジア古代鉄文化研究センター

編集・発行 東アジア古代鉄文化研究センター

印 刷 平和印刷



<http://www.ccr.ehime-u.ac.jp/aic/>